

富田常雄

武蔵坊弁慶

四

旅立の巻

む さし ぼう べん けい
武蔵坊弁慶(四) 旅立の巻

とみ た つね お
富田常雄

© Shoichiro Tomita 1986



講談社文庫
定価460円

昭和61年5月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12 21 ㊦112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——共同印刷株式会社

印刷——共同印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。(庫一)

ISBN4-06-183796-6 (0)

武蔵坊弁慶 (四)

目次

忍ぶ旅路	七
源氏揃	三六
水鳥	六九
黄瀬の里	九七
木匠の響き	一二〇
夏木立	一四三
車大路	一六五
怒りの虫	一九六
ちろりん流行	二三〇
雪の陣	二五五
旭の抄	二七八

武蔵坊弁慶(四) 旅立の巻

忍ぶ旅路

三方を翠巒すいらんにかこまれた京の街々は、今、近年にない賑わいを見せていた。他でもなく、祇園会おんえの祭りやまほこで山鉦の練り歩く日であった。

ただ、その賑わいぶりが半ば狂気に近く、なかば反抗的なものを含んでいた上に、入道相国しやうこくの手で、一院いちのいんを始め、新院、主上までが福原に行幸されて、都は主権者を失った形の時であり、本来なら、かげ祭りの形ばかりのものであるべきが、かく、賑わいを呈したことは一つの不思議であった。

はるか見上げる高さの鉦を立て、車輪二双を左右の大縄に結んで、数十人がこれを曳ひいていた。下には笛、鉦かね、太鼓たいこなどの囃はやしが乗り込んで、気が狂ったかのように囃し立てているのが、次から次へ続いた。

大縄を曳く者は庶民達であったが、歌う囃唄はやしうたにふと耳を傾ける者は思わず顔を見合わせた。

伊勢の瓶子へいし（平氏）は素甕すがめ（眇）なり

平相国は眇の子

都ほろぼす眇の子

もし、この囃声はしこを検非違使けびいしの手の者が聞けば、この民衆はたちどころに彼等の敵となったに違ちがいなく、多く流血をみたであろう。

平忠盛ただもりが初めて昇殿しょうでんを許されたとき、これを成上り者なりあがりと輕蔑てんじやうびとした殿上人でんじやうびとが、伊勢の瓶子は素麤すろなりといつて唱うたい囃した。けだし、忠盛は眇であつたからである。清盛の平相国は忠盛の第一子だから、眇の子という意味はおそらく、政道がやぶにらみのように曲がついていゝという意味である。

これは明らかに民衆の憤懣ふんまんの爆發であつた。元来、都の民衆にとっては、皇室の安泰ということが何よりも心の安らかさの拠りどころであつた。それが裏切られたからである。半年前の治承三年の秋、一院たる後白河法皇の院政を停止し奉り、鳥羽殿の離宮にお移し参らせたことは清盛に対する民衆の不滿を、表面には出ることなく高まらせたが、その後、四年の春には高倉天皇が第一の御子みこに位を譲らせられて、上皇となり、次いで、三月には嚴島いづくしまに御幸あるに及んで、民衆の不滿は大きな不安にまで高まつた。

嚴島神社は平家一門の氏神に似たものである。御讓位の後、まず参詣あるべきは八幡はちまん、賀茂かもの両社に限るのが先例であつた。熊野参詣、日吉神社御幸ひよしならば、前例もある。だが、嚴島参詣とは一体、どうしたことか。これは叡山や南都の輿論うろんであつたが、民衆は御輿振みこしりや、神木

をかついでの強訴ごうそには精神的に疲れさせられていたが、日吉や春日神社に対する信仰では純粹で、一点の曇りもない民衆にとっては、厳島御幸は世の末の出来事としか思えなかった。その上、御座船ござふねは宋という異国の人の持船であったというのだから、入道相国の人氣が地に墮おちたのも是非なかった。ただ、それが、あからさまに表面化されなかったにすぎない。

だから、今、きこえる囃唄こそ清盛への公然たる民衆の反逆であった。

平相国は眇すがめの子

都ほろぼす眇すがめの子

聞く、古老は肌あわに粟あわを生じた。民衆は時に命をかけて反抗する。

「夏さつきの頃のままであつたら、このようなことにもなるまいものを」
半狂乱のように囃はやし歌って練り歩く山鉾の行列を瞞みづめて老爺おやが呟つぶやいた。

それは、この五月、半年振りで一院が鳥羽殿から京都へ還御かんぎょとなり、八条烏丸からすまの、元八条院の御所に入られて、初めて都の民衆が愁眉しゅういを開いた時のことを指していた。つまり、院政が再び開始されるという意味ばかりではなく、世の中が通常に返るのだということを深く印象づけたからだった。

しかるに一院第二の御子たる高倉宮、以仁王もちひとおうの御謀叛ごむほんが伝えられ、宇治あたりで合戦が行わ

れ、南都、北嶺が騒然としていう状態の中で都遷^{うつ}しが始まり、一院、新院、主上までが都には在^{おほ}しまさなくなつた。都は荒廃に任せるつもりであらうか。民衆の不安はやがて根強い怒りとなつた。都であつて都でなくなつた、この京都の繁華街ともいうべき、北は三条、南は松原、東は高倉、西は堀川の祇園鉾の練り歩かれる地域に属する都の民が山鉾^{やまぼこ}の行列に熱中し、狂気に等しい囃唄を怒号したのも、入道相国を始め平家一門へのあからさまな反抗を示していた。

京都が都ではなく、福原に都遷^{みやこうつ}りすれば、彼等の商いも、生活の道も断たれるのだから、この激昂は当然であつた。

「おおつ、あれは高倉宮に在^{おほ}すぞ」

誰れか一人が鋭く叫んだのがきこえた。

「なんと、あの御謀叛^{むほん}の宮とな」

山鉾^ひを曳く者達は綱を持つ手を休めて眼を光らせた。

「おお、あの杜若^{かきつばた}の狩衣^{かりぎぬ}こそ高倉宮じゃ、なんと、勇ましげな。従^{たぐま}う者も遅しいわ」

そのような言葉は誰れが言い、誰れが問い返すのでもなかったが、一つの真実を築き上げていった。

「高倉宮は宇治の合戦で源三位頼政殿^{げんざんみよりまさ}が討たれてから、光明山で矢に射たれ給うたときいたがのう」

「滅相^{めっそう}もない。あの通り、ご健在じゃ。それに、源三位頼政殿が討たれたというも、平家側の

怪しい言い伝えというぞ」

「ならば、源氏揃も近いな」

「おお、そうよ」

「おお、高倉宮が通らるるわ。平家一門のはびこる中を怖れ気もなく、勇ましく、頼もしげな
ことよ」

山鉾を曳く者も、商家の者も、しばらく、茫然として見とれる中を、騎馬武者二騎を先に、
黒鹿毛の馬に召された、かきつばたの狩衣姿の宮は大きな山法師を馬側につけ、後には具足姿
の従者、軍兵を凡そ三十ほど従えて、この三条通りを粟田口の方へ橋を渡って行った。

「うわーっ」

その一行を見送って、行列の群れは歓呼の声を挙げて惜しまなかった。

「うわーっ」

「うわーっ」

「宮は東国へ下られるのじゃ」

と、どこかで誰れかが叫んだ。

馬側の見上げるばかりの法師が、大長巻を高々と挙げてこれに答えるもののように振って見
せたが、やがて一行の姿は夕靄の中に融けた。

弁慶は黒鹿毛と並んで足を運びながら、桂包みにした頬を莞爾とほころばせた。

夜の帳が下り、粟田口街道から山科やましなに向かう道はすでに暮れきって、月のない夜の静寂が、四辺を領していた。

「鬼若、口を利いてもいいか」

馬上の、かきつばたの狩衣に烏帽子えぼしをいただいたほくろが馬側の弁慶に声をかけた。

「よかろう」

「このように黙っていては、おれは口の辺がかゆくて堪たまらぬ」

「だが、ほくろ、お許もとは尊きおん方の身代わりとなっているのだ。心許すな」

「ふん、尊いおん方はもう飽きたぞ」

「まだ早い。東国街道をせめて、遠州に出るまではのう」

そう言いながら、弁慶は新宮十郎が持参した今は亡き以仁王の令旨りようじが、ちょうど、伊豆の頼朝を始めとして、諸国源氏に伝えられる頃だろうと推おしはかった。旗挙げのその時までは、なんとにしても、以仁王の薨去こうきょを公然のものにしてはならなかった。さればこそ、彼は傀儡くわいの群れを都に放って庶民の間に流言りゆうげんを流させ、ほくろを高倉宮に仕立てて、巨椋おぐらの池に沈まして、知盛の軍兵共を混乱させた。六日七夜、彼等は池を警護してすごしたが、御遺骸などは浮かぶ道理もなく、結局、次郎直実と判官盛澄が見たものは、浴あみしている、傀儡女の惚おればれするほどの裸身だけであった。ようやく、彼等が諦めて池を引き上げた後、池の底から狩衣は再び世に出て、今はほくろがこれを身にまわっていた。

祇園会ぎおんえの祭りを当てこんで、先に、傀儡を都にまぎれこませておき、高倉宮に身をやつした

ほくろの一行が現われると、これに歓呼の声を浴びせさせた。庶民はもとより、以仁王を見奉った者としてないのだから、気高い馬上の狩衣姿や、逞しい従者達を眼にすると、平家への反感の現われも手伝って、忽ち、^{たちま}これに歓呼の声を惜しまなかった。

弁慶にすれば苦しい策であった。が、動揺している世の中では、かかる虚構も通用する。また、彼が従兵に選んで、身をやつさせた傀儡の男達は強靱な^{きやうじん}体力を持ち、仙術にすぐれ、平家の追手に追われようとも、恐らく、ほくろともども、彼等に捕われるような鈍さを持ってはいない。

「なあ、鬼若、ここらで休ませてくれ」

ほくろが馬の上から言った。

「いまだ、人里に近いが」

「馬を走らせているなら、おれは疲れはせぬが、こんなに遅く歩かせては、尻が痛くてやり切れぬ」

「はっはっ、そうか」

「降りてもいいか」

「よかろう」

すると、ほくろは身軽く馬を降りて、^{かたわら}傍の草の上に腰を下ろした。

「鬼若、徳も言っていたが、もしかすると、おれは死ぬかも知れぬな」

ほくろはしんみり言った。

「なんとして」

「鬼若のために身代わりになってじゃ」

「そのようなことはあるまいぞ」

「いや、おれには判る。構わぬ、死ぬは一度じゃ。鬼若がそれで助かればな、心地よかろ」
そう言つて、ほくろは草の中に仰向けに倒れた。弁慶は不憫であつた。だが、このようにほくろを利用してゆけば、いつかは彼女も彼のために死ぬ日がないとは保証し難い。

弁慶は心の中で詫びながら黙つて腕を組んだ。

清盛は釣殿の芻勾欄に肱をかけ、陽に輝く瀬戸内の鏡のような海を瞞めていた。

背後に控えた知盛は老いた父の、この頃の焦躁に充分な同情を持つてはいたものの、そのやり方が、全然、民意を無視したものであることに深い憂いを覚えずにいらなかった。

長兄の、小松の内府重盛が生きていたならば、これ程にも極端なことはしなかつたろうと思える。諫める者の少なくなつた、きようこの頃こそ、平家一門にとつての大きな危機でなくてはなだらうと考える。

福原の清盛の屋形は主上、一院をはじめ公卿殿上人が溢れるほどに入り込んでいた。これとても、入道が人質のつもりで、急に行なつた政治の結果であつた。ここへ都遷りして、南都北嶺の勢力から主上、一院を遠ざけ、平一門の安泰をはかろうといふのである。このきつかけを直接に作つたものは源三位頼政の反旗であり、以仁王の御謀叛であつた。彼はそのこと以来、

人を信じられなくなっていた。

「高倉宮の御遺骸はいかようにも見つからぬと言ったな、左兵衛督」

と、清盛は海に向かったまま言った。

「いかにしても。美豆の御牧に屯する傀儡の群れにあるときき、ただちに軍兵を差し向け、某も高倉宮とおぼしき御姿を拝しましたるなれど、召されたかきつばたの狩衣にそれと覚えるばかり、それと、たしかめぬうち、馬を駆って逃げさせられ、遂に巨椋の池に入水あそばされたるまま、今日に至るも未だ御遺体は浮かびませぬ」

「何故、船を出し、人を潜らせても探さなんだ。海とは異なり潮の流れのあるわけもなからう」
「されば、すぐる日に申し上げました如く、千丈ヶ淵とて、人を潜らしても底に達する能わざる難所とて、手のほどこししようもござりませぬ」

「高倉宮の令旨を受けし源氏の者共、未だ現われぬか」

「未だに、ただ」

そう言つて、知盛は忌々しそうに奥歯を噛んだ。

「都にては、なにを狂いしか、祇園会の祭りに山鉾を練り、あらぬ囃唄をば口に唱えて狂気の如く騒ぎたてしおもむき」

「あらぬ唄とは」

「されば」

そうは言つたが、知盛は父の手前、わずかに躊躇が働いた。しかし、これはむしろ、彼の耳